

第 37 回大会エクスカーションに参加して 幡野恭子

日本藻類学会第 37 回大会エクスカーションは、「山梨のワイナリーを巡って山梨ワインを堪能する」という企画で、ワイン好きにはとても魅力的な催しでした。2013 年 3 月 29 日（金）の研究発表後に、参加者 19 名は三々五々山梨大学正門付近に集まり、午後 2 時すぎにバスで出発しました。当日は、大会会長の御園生先生にご案内いただきました。

バスは武田通りの満開の桜並木を通り抜け、南へと進みました。車窓からは麓がやまなみに隠されて雪をかぶった富士山の姿が楽しめました。日当たりや風通しのよさそうな傾斜地には、棚栽培のぶどう畑が広がっていました。この時期のぶどう棚では、剪定後の蔓のみが棚を這っていました。笛吹市に入ると、ピンク色の桃の花や白色のスモモの花があちこちに咲き、華やかな景観が楽しめました。道中、規模の小さそうなワイナリーをいくつも見かけました。

最初の訪問場所は、甲州市近代産業遺産の宮光園でした。宮光園は、ワイン産業の先覚者である宮崎光太郎氏が自宅に整備した宮崎葡萄酒醸造所と観光ぶどう園の総称です。日本のワイン醸造の黎明期醸造施設のひとつとして知られています。主屋の 1 階は日本建築で、座敷、板間、土間などがありましたが、主屋の 2 階は洋館で、和洋折衷のモダンな建物でした。主屋 2 階は展示室となっており、創業当時のボトル、ワインラベル、看板、実験器具、写真、資料などが並び、ワインづくりや宮光園の歴史を知ることができました。展示室の見学後、1 階のお座敷で、「葡萄とワインの里の原風景」という動画を見ました。宮光園で平成 20 年度に発見された 35 ミリ映画フィルムに、大正から昭和初期にかけてのぶどうの収穫やワインの醸造と運搬、当時の皇族の行啓、行幸の様子が記録されていたようで、それらが編集された貴重な映像でした。ワインづくりに情熱を注いだ先人達の存在が、後の美味しいワインへ繋がるのを感じました。

次に、宮光園の向かいにあるワイナリー「シャトー・メルシャン」へ移動し、まず、ワイン資料館を見学しました。現存する日本最古の木造ワイン醸造所の建物がワイン資料館として開館されており、日本ワインの誕生や歴史について紹介されていました。また、ワインの醸造器具、木製のワイン樽の貯蔵庫などが当時のまま、展示されていました。続いて、隣接したワインギャラリーへ入り、参加者はワインショップの見学や、テイスティングカウンターでのテイスティングを楽しみました。日本のひとつのワイナリーで、ブドウの品種や産地、栽培方法、発酵・育成方法、ヴィンテージなどにより、多様なワインが醸造されていることがわかり、とても驚きました。

さらに、近くの蒼龍葡萄酒のワイナリーまで、少し歩きました。1899 年に勝沼に創業した老舗ワイナリーで、赤煉瓦屋根で欧



ワインの試飲と歓談風景（ぶどうの丘ワインカーヴにて）



大会会長の御園生先生とエクスカーション参加者たち
（ぶどうの丘ワインカーヴにて）

風のおしゃれな建物でした。無添加ワインの元祖メーカーだそうです。売店には、さまざまなワインが棚に並び、なかには一升瓶入りのワインもありました。約 40 種類のワインが無料で試飲でき、私も短時間で数種類を飲み比べてみました。滞在時間が限られており、ワイナリー内の見学ができず残念でした。

再びバスに乗り、甲府盆地に広がるぶどう畑の中を移動し、小高い丘の上に建つ「勝沼ぶどうの丘」に到着しました。ここは甲州市が運営する観光施設で、地下のワインカーヴでは、市が主催する品質審査会に合格した約 180 銘柄の山梨県産ワインが試飲できます。白ワイン、ロゼワインは山梨県産ぶどうを 100% 使用したもの、赤ワインは国産ぶどうを 100% 使用したものが対象です。参加者は専用のタートヴァン（きき酒杯）を受け取り、足早に地下のワインカーヴ（ワイン貯蔵庫）へ降りました。そこには 2 本の通路があり、白ワインコーナーと赤ワ

イン・ロゼワインコーナーに分かれていました。各通路の中央にはワイン樽がテーブル代わりに等間隔で並び、その上には約10本ずつの開栓された試飲用のワインが置かれていました。ワイン樽の両側には、販売用のワインが銘柄ごとに棚に寝かされていました。ワインは作り方やぶどうの種類、味（辛口～中口～甘口、軽口～中口～重口）により大まかに分けられて、順に置かれていました。一度にこれだけの数のワインを眺めるのは初めてで、壮観な風景でした。お気に入りの美味しいワインを探しながら、ラベルを見て興味を持ったワインを飲み比べ、楽しく試飲を続けました。ワインの銘柄が多く、飲んでいううちに、どれが美味しかったのか、よくわからなくなりました。また、研究分野が離れていて、これまであまり交流がなかった参加者

の方々と、ワインを通じて会話がはずみ、親睦を深めることができました。やがて集合時間となり、参加者の多くはほろ酔気分で、バスまで戻りました。バスは18時頃甲府駅前に到着し、解散となりました。

普段は外国産のワインを飲む機会が多いのですが、このエクスカッションに参加して、山梨ワインの多様さ、奥深さ、美味しさを体験することができ、大変楽しい時間を過ごせました。また、甲府盆地に桃源郷を感じました。大会準備でお忙しい中、今回のエクスカッションの企画とお世話を下さった山梨大学の御園生先生や関係者の方々のご厚意に心より感謝申し上げます。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

藻見遊山

LIXIL ギャラリー企画展

「海藻 海の森のふしぎ」展

Seaweeds, Wondrous Forests of the Sea

2013年6月8日(土)～7月23日(火)

真偽のほどは定かではないけれども、安土桃山時代、豊臣秀吉が大阪城を築城する際、巨石を運ぶ轆轤を滑らせるために大量の昆布（実際にはカジメなのではないか）が使われたらしい。その城下町でいま、海藻の企画展が開催されている。テーマは、身近だがよく知られていない海の植物、海藻の不思議な世界をいろいろな分野から紹介するというもので、「建築とデザインとその周辺」を巡って独自の視点で多彩な企画展を連発している LIXIL が制作し、それに神戸大学内海域環境教育研究センター、国立科学博物館、名古屋大学博物館、北海道大学理学研究院などが協力している。藻類学会員からは、野田三千代氏（海藻おしば協会）が「海藻おしば」を約100点を、川井浩史氏（神戸大学）が「瀬戸内海産藻類標本集」から厳選40種のエキシカータ標本を出品されている。筆者も国立科学博物館が所蔵する岡村金太郎著『日本藻類図譜』の原図20数点を出品した。今回のような規模で公開されたことはこれまでにない。この原図は岡村先生が『図譜』のために水彩で描かれたものだが、実際に印刷・出版された図版ではそれを基に画工が単色刷用に描き直しているの、長年『図譜』を愛読し、図版を凝視してこられた海藻研究者がご覧になれば、オリジナルの肉筆がもつ鮮やかな色彩に仰天されること必至である。

企画展開催と同時に、展示図録に相当する“Booklet”が書店で販売されている。その内容については、いずれ当誌の書評で紹介されることを期待したい。また、大阪会場が終了後、時期未定ながら東京でも開催を予定しているとのことである。

(北山太樹)

【LIXIL ギャラリー大阪】

開館時間：午前10時～午後5時

休館日：毎週水曜日

入館料：無料

所在地：大阪府大阪市中央区久太郎町4-1-3 伊藤忠ビル1F

交通：御堂筋線・中央線本町駅、14号出口

問合せ：Tel 06-6733-1790 Fax 06-6733-1791 URL: <http://www1.lxil.co.jp/gallery/>